

## オオトックリイチゴ 【学名：*Rubus x hiraseanus Makino*】

オオトックリイチゴはバラ科キイチゴ属の一種で、彦根城以外には知られていない彦根城に固有の植物です。春に直立する茎を出し、茎の高さは2~2.5mにも達します。6・7月に側枝を伸ばすようになると横臥状になり、枝の先端は地につくと発根して株となります。葉は奇数羽状複葉で全長20~25cmになり、小葉は5枚のものや7枚のものがあります。6月上・中旬に開花し、紅紫色の5枚の小さな花弁をつけます。7月になると淡紅色に熟した果実が実り、食することも可能です。

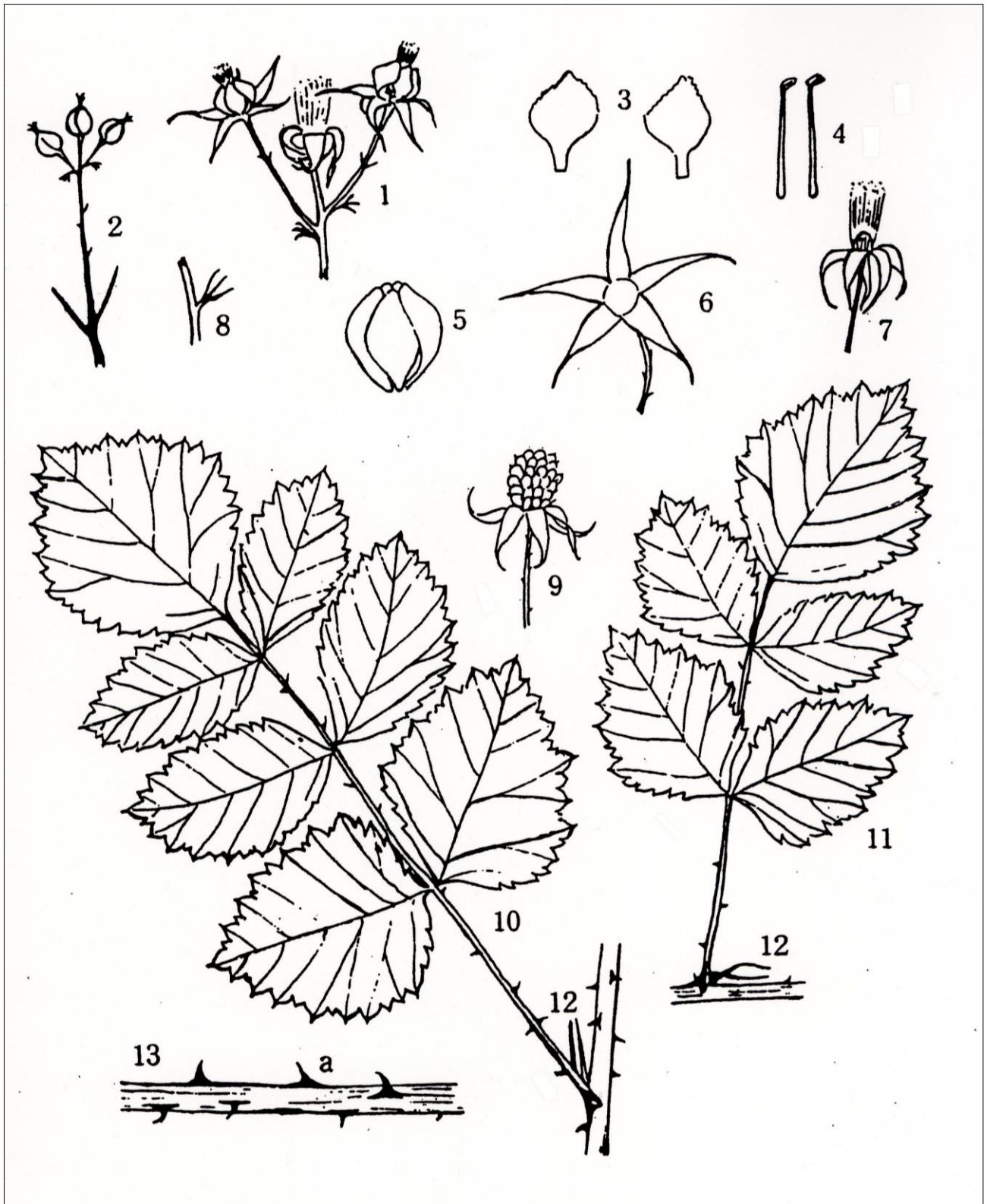
このオオトックリイチゴは、ナワシロイチゴとトックリイチゴの自然雑種と考えられています。ナワシロイチゴは日本の山野のいたるところに自生し、<sup>なわしろ</sup>苗代の頃に実が赤く熟するのでこの名があります。トックリイチゴは、中国大陸及び朝鮮半島が原産で、庭園の<sup>しよくさい</sup>植栽にしばしば用いられる植物です。当初の発見箇所が<sup>おもてごてん</sup>表御殿跡（現在の彦根城博物館の地）であることを考えると、表御殿の庭に植栽されていたトックリイチゴが、在来のナワシロイチゴと自然交配した可能性が考えられます。

オオトックリイチゴの発見者は、日本の植物学の父と称され、多くの植物を発見・分類した<sup>まきのとみた</sup>牧野富太郎(1862~1957)です。明治27年(1894)11月、牧野が伊吹山の植物採集の途次に彦根城に立ち寄った際、表御殿跡で発見しました。この時は茎葉だけだったため、明治34年(1901)7月と35年(1902)6月に、当時の滋賀県立第一中学校（現在の滋賀県立彦根東高等学校）に在職中の<sup>ひらせきくご</sup>平瀬作五郎(1856~1925)が、牧野の依頼でオオトックリイチゴの果実及び花のついた標本を作成し牧野に送付しました。平瀬はイチョウの精子発見者として世界的名声を博した人物です。自身で作成した標本と平瀬から送られた標本を基準として牧野は新種と判断し、学名に平瀬の名を入れて "*Rubus Hiraseanus Makino*" と定め、明治35年(1902)に『植物学雑誌』第16巻に記載しました。

なお、現在のオオトックリイチゴは絶滅しないよう彦根城内にて育成管理しており、平成初年に<sup>てんびん</sup>天秤櫓前に株分けされたものが観光客に公開されています。

本種はナワシロイチゴとトックリイチゴの自然雑種が今日まで生き続けている点で貴重であり、また、日本植物学界の二巨星により彦根で発見・命名された記念すべき植物と言えるでしょう。





1 「集散花序」の開花 2 つぼみ 3 花弁 4 おしべ 5 直立した花弁 6 がく  
 7 花弁を除いた花 8 花梗の托葉 9 果実 10 7小葉の奇数羽状複葉 11 5小葉の  
 奇数羽状複葉 12 托葉 13 茎 a 刺(とげ)

『彦根の植物』村松七郎著より

彦根市文化財課

TEL.0749-26-5833 FAX.0749-26-5899 e-mail:bunkazai@mx.hikone.ed.jp